

提出締切：2009年4月20日（月）

2007年度採択学内提案公募型研究推進プログラム「基盤的研究」 研究成果報告書  
(研究期間：2007年4月～2009年3月まで)

研究代表者	所属機関・職名： 文学部 准教授 氏名：加藤政洋
研究テーマ	都市学の再構築に向けたポストモダン地理学からのアプローチ

### I. 研究計画の概要

研究の計画について、概要を記述ください。

産業構造の転換とともに都市もまたその姿を変えるのが常であった。寄せては返す波のように登場してくる新しい都市研究が、そうした都市空間の再編と連動していることはよく知られている。近年では、都市のグローバル化論が隆盛し、ポストモダンないしポストメトロポリス的な都市の空間編成が問われるようになった。本研究は、近年の（英語圏を中心とする）新しい都市論の成果を踏まえながら、政治経済史と文化社会史の節合を可能にする空間論として、都市学を再構築することを大きな目標とした。「格差」として現われる現在のありようは社会のなかで構造化されているとともに、特定の地区に貧困現象が集中するごとく空間的な問題でもある。その意味でも、空間論として定立することが必要と考えたからである。

本研究の特色は、フランスの哲学者 H・ルフェーブルが主張した「空間の生産」を機軸に据え、都市空間の編成を動的に捉えていくポストモダン地理学からのアプローチにある。とりわけ UCLA を中心に進められた都市・地域研究を参照することで、江戸 - 東京学に顕著であった社会・文化史を超えて、都市の空間を生産し再編する、当の政治力学に焦点を当てる予定である。

### II. 研究成果の概要

2カ年の研究成果について、概要を記述ください。成果の詳細は3ページに記述ください。

本研究では、単なる比較都市研究にとどまらない都市学のありようを探究すべく、フランスの哲学者アンリ・ルフェーブルの空間論・都市論をあらためて読み直してみたところ、ひとつの研究視点を引き出すことができた。それは、都市の植民地性という問題である。都市空間は、つねに外部を取り込みながら編成されるのであり、さまざまな分断線や較差が可視/不可視に刻み込まれることで、モザイクとも呼ぶべき社会を構築してきた。古くは都市内部の空間構造を同心円モデルとして定式化したシカゴ学派も、明確に指摘したわけではないにせよ、都市発展がセグリゲーションを随伴することを見て取り、差異が多様に空間化される過程を描いたのである。これらの点を念頭におきつつ、概念を整理した論文「都市編成と「植民地なき植民地主義」」、そして事例を神戸に求めた論文「社会的実験室としての都市 ミナト神戸の都市空間形成を題材にして」を発表した。

また、「空間の生産」論を参照枠組みとしつつ、場所の文化ポリティクスを踏まえてより具体的な歴史地理に迫ろうとしたのが共著『モダン都市の系譜』である。本書は、近代化/文明化する都市の変容過程を、場所に固有の問題から解きほぐし、都市空間をめぐって現働化する政治力学を明らかにしようとしたものにほかならない。

本ページはホームページに公開いたします。1ページに収めてください。